



山陽スピリット ニュース No.26

2021(令和3)年11月29日

発行：学校法人 山陽学園 山陽スピリット推進室

卯の花

上代 万里江

この度「山陽スピリットニュース」への原稿の依頼を受けたので、私にとっては祖母となる上代淑、父皓三のことで、おそらくあまり知られていないと思われることから書いてみた。

私は末の子で長兄知夫とは一まわり歳が違い、父が岡山から東京へ移り住んでから生まれた。しかも第二次世界大戦もあったため、私が上代淑を認識したのは、淑がすでに70歳後半で、私自身は小学校低学年であったかもしれない。その頃、淑は山陽学園が夏休みに入るとその翌日上京して9月の始業式前日に帰岡するというのが毎夏の習慣であった。東京は岡山より涼しいからということで、確かにその頃は環境もよくて涼しかったようだ。もうひとつは、家族と一緒に過ごすという大きな楽しみがあった。

淑は学園のことも同様、家族への愛情が深く一人一人それぞれに、必要としている何かをしてやりたい、という気持ちがいつもあったようだ。

その頃は、両親と兄妹三人の生活の中で、皆、淑のことを「おばあちゃん」と呼んでいた。あまり歳のいかない私が印象的だったのは、そのおばあちゃんが来ると、食卓の席が一つずつずれることだった。つまり通常は一番奥の席が父だったのが、奥は淑おばあちゃんの席となり、にぎやかな食卓になった。

その一か月は、すべておばあちゃん中心の生活であった。冗談を言ったり笑ったりすることはあまり無く、笑うと怒られそうだった。そもそも私は、淑おばあちゃんからの評価が低かった。家の手伝いはせず、庭へ出て遊んでばかり、といった具合だったからだ。もう少し上手に接することができていたら、若い頃のことやその他いろいろなことを聞けたのに

と残念に思う。

淑おばあちゃんの滞在中は、卒業生の訪問が多かった。特に親しそうだった卒業生(森久保寿様、吉岡操様)は、朝から二人揃ってお見えになり、夕方までいらっしゃることもしばしばであった。こうした同窓生への心遣いや、淑の日常生活の様々な世話をしたのは私の母(延世)だった。母も山陽学園の卒業生なので、なかなか大変な立場だったと思う。母は人に対して細やかな心遣いができ、温かい言葉と雰囲気をも自然に持っている人だった。そういうわけで、淑も母のことはいつも頼りにしていたが、いつか母が私に「便利なだけなのよ」と笑いながら漏らしたことがあった。

概して人は歳を取ると、その時の世の中を批判する傾向がある。淑おばあちゃんもその頃の社会、その他まわりの事態を憂いて「いけん一」と岡山弁で言いながら、じつとうなだれて考えこみ、「早く天国に行きたい、あの人もいる、この人もいる」と嘆くことがあった。私の父はまだ若く元気で活躍中、一向にお構いなし、「何が気に入らんのですか!」と強い言葉を放った。父は晩年近くこの淑の心境を理解したのかもしれない。本当の親子のようにお互い遠慮なく自然な感じだった。

夏休み中は生徒や先生方から学園の様子や、テニス部、バドミントン部などスポーツでの活躍の報告が手紙やはがきで届くと、既に目が悪くなっていた淑だが、必ず返事を書いていた。ありのままの語り掛けるような、喜びも落胆も正直な言葉で書かれていた。淑は学園のことをいつも考えていて、特に財政のことは大きな問題であったようだ。自分で電話をかけて、難しいことは言わず、独特の口調で、ひたすら山陽のためにと切々と金銭的な援助を頼んでいた。何か不思議な力があつたのだろうか、電話の

向こうの答えは、いつも「はい、わかりました」だった。

淑にとって山陽学園がいかに大切に、自分のすべてをかけている存在なのだという、生徒、教職員、同窓生すべてが淑と一体なのだというを私はその頃に、自然に感じ取ったように思う。

その後時は流れ、昭和40年(1965年)、父皓三が日本医科大学を定年退職した。是非、岡山へ帰り、山陽学園を継いで欲しいという強い要望が、当時の理事長や同窓会からあった。父は医学者としての道を歩んできたし、中学生、高校生への教育とか、学校経営などに携わるような大役が自分にできるだろうか、という懸念や不安をかなり持っていた。それは山陽学園の伝統を担うことの重責を知っていたからであろう。かなり悩み、考えたようだったが、淑への恩返しの気持ちもあり、淑の精神を守り伝えていくこと、学園の発展のために働くことが自分の使命であると考え、この責任ある大きな仕事を引き受ける決心をした。

校長として就任したのち、高校に音楽科を作り、4年後には山陽学園短期大学を設立、淑の念願であった附属幼稚園を併設した。その後20年間、多くの方々の協力を得ながら、父はこの大変な仕事に精魂を傾け、亡くなるその日まで山陽学園のことが頭から離れなかった。本当に苦労が多かったと思うけれど、そのような中で生徒や学生と接する喜びを感じ、その成長に喜びと期待を思い、それがまた励ましとなっていたのではないだろうか。「生徒第一」を繰り返し説いた淑の精神を、父は自らの実践によって訴えたように思われる。

父は家であまり多くを語ることはなかったが、その頃ひとつ印象深いことがあった。改まった時ではなく、何となく過ごしているときに、父が「おばあちゃんは偉すぎたな」とつくづく言った。それがどういう意味かなど聞くこともしなかったが、その一言を私はずっと忘れていない。おそらく、淑という偉大な人の後を継ぐことの困難さ、自分の無力さ、といったものを感じていたのではないだろうか。

大正6年(1917年)、皓三は片岡家から上代淑の

養子となった。20歳の時である。それより前、皓三が旧制第六高等学校時代に、淑とは基督教青年会で知り合った。この出会いは全く偶然なのだが、そこに目に見えない何かを感じる。お互いに直感的に信じられるもの、心が通じるものがあったのではないか。皓三は淑の精神をもっともよく理解してそれを実践した。まだ先のわからない若い青年を信じて、自分の後を託そうとした淑、それに生涯を通じて応えた皓三、多くの人が繋いできた山陽学園の長い歴史の中では、ほんの一頁かもしれないが、大切な一頁のように思う。

東山にある上代淑の墓、附属幼稚園を見下ろす平井の丘にある、その墓石には上代皓三の言葉と文字で、次のように刻まれている。

「神と人とに愛されて其の生涯を女子教育のために捧ぐ」

この短い言葉の中に淑のすべてがこめられている。

淑のことを時折詠んだ短歌が、皓三の歌集の中にあるので掲載させて頂いた。

東京の涼しさ戀ひて來たまひし

わが母に一夏ははやく過ぎにき (昭和28年)

わが母が八十六になりたまふ

卯の花やさしけふの日のため (昭和32年)

※表題はこの歌に拠る

亡き母の心おもひて耐へて來ぬ

すぎゆきは長き八年の間 (昭和48年)



父皓三、祖母淑、母延世(昭和30年代初め頃の撮影)

この写真は、すべてを物語っているように思われる。